The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人身御供祭祀論
Author(s)	六車, 由実
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43340
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	六車由実（むぐるまゆみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　16692　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻
学位論文名	**人身御供祭祀論**
論文審査委員	（主査） 教　授　中村　生雄 （副査） 教　授　川村　邦光　　助教授　冨山　一郎

論文内容の要旨

本研究は、「人身御供」の物語を由来譚として持つ祭の性格と内容を、伝承と儀礼の双方から検討することにより、日本における「人身御供祭祀」の民俗思想史的な意義を考察するものである。「はじめに」「序章」につづいて全4章の「本論」、さらに「終章」と「おわりに」が付され、400字詰め原稿用紙に換算して510枚ほどにまとめられている。

序章の「『人身御供』はどのように論じ得るか？」では、本研究全体をつらぬく基本的な関心の所在を提示するとともに、近代日本の知識人が「人身御供」をはじめとして「人柱」や「カニバリズム」といった、いわば「供犠」をめぐる問題群をどのようにとり扱い、そこで何が解明され、何が隠蔽されていったかが、明治期の大森貝塚や大正期の皇居からの人骨発掘事件を材料に概観される。

第1章の「『人身御供の祭』という語りと暴力」では、尾張大国霊神社の儺追祭を事例にして、近世において「人身御供の祭」だと言われた祭礼行事が、藩当局や近在の知識人からどのように理解され、それに対して地元の神官や村人たちがどんな対応をとっていったかが、各種の地誌・随筆類をはじめとして、行政文書や神社側の記録をもとに、緻密に再構成される。そこでは、外部から付された「人身御供の祭」という「他者の語り」が、祭を実際ににになう地元住民によって自分たちの祭の起源を説明する「自己の語り」として受容されていく経過が、公権力による祭の暴力性にたいする介入と、それに対応する地元住民の暴力にたいする新たなポジショニングの問題として解明される。

第2章の「祭における『性』と『食』」は、各種の「人身御供祭祀」の歴史的な変遷とそこでの女性の役割の比較検討によって、日本の神社祭祀の特質が儀礼論的な視角から考察される。そこでは、女性が神にたいする性的な奉仕者としてイメージされていると同時に、「神の食べもの」としてもイメージされていく要因が、神社祭祀・村落祭祀における男性中心的な頭屋祭祀の制度化という歴史過程のなかに見出されていく。

第3章の「人身御供と殺生罪業観」では、仏教の不殺生戒の影響により人身御供の物語でイケニエとなる対象が人から獣へ、そしてさらには魚や穀物へと変化していく過程が供犠論におけるヴィクティムの置き換えというテーマに沿って考察され、第4章の「人形御供と稲作農耕」では、人のかたちをした供え物を神前に捧げ、その人形を祭のなかで氏子が食べる行事が、稲作農耕の一般化という生業の変化に即して考察される。

この第3章と第4章では、「人身御供祭祀」にかかわる伝承や儀礼の具体的な細目が、とくに仏教の殺生罪業観という倫理的規範の浸透と、それに影響された狩猟・漁撈から稲作農耕への生業の大幅な転換という歴史の流れに即して解明される。前者は「人身御供祭祀」の思想的・宗教イデオロギー的側面からの分析であり、後者は「人形祭祀」

という稲作農耕地帯に優越する共食儀礼の意味を身体論的視角から分析したものと言える。

終章の「人柱・人身御供・イケニエ」では、これらの問題が異人論の文脈で解釈される近年の傾向に疑念を呈し、穢れ意識や殺生罪業観の浸透により、祭における「供犠」の要素を希薄化させてきた農耕社会＝日本において、神に喰われて神と一体化することを幻想する「人身御供祭祀」は、暴力への願望を介して失われた生の実感をとりもどすための文化的な装置であったと結論づける。

論文審査の結果の要旨

本研究は、従来の説話伝承研究や民間の祭礼研究など、特定の研究分野や特定のディシプリンに拘束されることなく、独自の問題設定と考察で構成されたオリジナルな研究成果である。そこでは、歴史資料を活用して「人身御供祭祀」にかかわる伝承と儀礼の変容過程が跡づけられる一方で、広範囲のフィールド調査にもとづく豊富なデータによって「人身御供祭祀」の細目の比較対照と類型化が試みられている。そしてその双方がいわば交差する地点から、「暴力」にたいする仮説的な見解が、日本の神祇祭祀の核心の問題として提示される。すなわち、これまで説話論的な視点でしか扱われなかった「人身御供」のテーマが、ニエ（食べもの）をそなえて神を祀るという具体的な祭礼・行事との関連のなかで捉え直され、ニエの祭が仏教的な殺生罪業観の浸透のなかでどのように再編成され、新たな意味と形式を獲得していったかが明らかにされる。そして、そのような「人身御供祭祀」の形成過程を歴史的に跡づけ、それを儀礼論的に分析することによって、「暴力」という人間の本源的な欲望にたいする独自の見解が示され、ひいては、日本の神祇祭祀の全体像を見直すための新たな視座が提供されたと言える。

むろん、そうした積極的な評価と裏腹のかたちで、本研究にたいしてはいくつかの問題点が指摘される。すなわち、本研究が標榜する「民俗思想史」がこれまでの民俗学・歴史学・思想史等々の関連諸学とどう関係するのか、その方法論や対象の独自性に即して十分には説明されていないこと、あるいは、「暴力」の問題を扱うさいの理論的枠組みにかんして、その研究史的背景を踏まえた検討が不足していること、またフィールド調査による資料が祭礼・行事の形式面に偏っているようであり、インフォーマントからの生まのデータが少ないこと、などが指摘される。また、「人身御供祭祀」に登場する「神」の理解がいくぶん単調であるために、祭において表現される「暴力」の捉え方も図式的・一面的になっているきらいがあること、また、「人身御供祭祀」をめぐる近代知識人の言説を、近代的な史学や民族学が抱え込んでいった帝国主義的・植民地主義的な知の編成とのかかわりでとらえる視点が欠けているなど、今後の課題として残された部分は少なくない。

このような問題点はあるものの、本論文の力強い構想力と大胆な考察が生み出した成果は傑出したものであり、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。